



中央大学法学部寄附講座
『福祉と雇用のまちづくり』

第10回

人生100年時代とごちゃまぜ社会

2019年6月19日

社会福祉法人佛子園 理事長
雄谷 良成 氏

■誰もが集える“ごちゃませ”の環境をつくる

佛子園（ぶっしえん）は、戦後、孤児や身寄りのいない障がい児をお寺で預かることからスタートし、以来、障がい児や高齢者向けの施設を設けてきました。

活動の転機は、石川県小松市に2008年にオープンした「三草二木 西圓寺」にあります。住職が亡くなり荒れ果てたお寺を何とかしてほしいと住民から懇願され、大人も子どもも健常者も障がい者も高齢者もみんなが“ごちゃませ”で集えるコミュニティスペースとしてリノベーションしました。

その後、現在は石川県を中心に、カフェ、温泉施設、高齢者や障がい児向けのデイサービスや入所施設、サービス付き高齢者向け住宅などを併設した施設や、町中の空き家を活用してごちゃませになる地域デザインに取り組んでいます。

■孤独と長寿化にどう対応するか

日本は今、さまざまな課題を抱えています。全国には中高年の引きこもりが61万人もいます。何かしらのきっかけで、孤独な状態になっているのです。健康寿命も重要です。書籍『LIFE SHIFT-100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社、2016年）では、2007年に日本で生まれた子どもの半数が、107年以上生きるという統計が紹介されています。現在の平均寿命は85歳程度ですが、そこから25年も延びるのです。お金や時間の使い方を考え直す時期にきています。ほかにも人口減少や過疎化、地域産業の衰退などの問題もあります。

これらの問題に対して、“ごちゃませ”の地域戦略が解決のカギとなると感じています。

■共感力と繋がり影響力

いくつか興味深い研究を紹介します。

・あくびの伝染：動物行動学者のフランス・ドゥ・ヴァール氏が提唱。動物には先天的に共感力がある。あくびをしたり赤ちゃんが泣いたりした時に、周りが同じ行動をとるのは共感力によるもの。

・つながりの法則：公衆衛生学の大家、ニコラス・A・クリスタキス氏が説いた。誰かが「幸せ」と感じた感情は、本人の知り合いの知り合いの知り合いにまで伝播する。その範囲は1マイル（1.6km）圏内で、互いに見知った関係でなくても影響するという。

・生きがいと生存率：東北大学の辻一郎教授が9年かけ追跡調査。生きがいや人生の目的の有無により、生存率は10ポイント以上、要介護認定を受ける人の割合は2倍の開きになる。

つまり独居や引きこもりなど地域と関係が絶たれると幸せの伝播は起こらない、また障がい者差別により生まれた負の感情は地域を不幸せにするといえます。ちなみにダウン症の人の92%は幸せと感じているという調査結果があります。彼らとの共生は地域に幸せにするかもしれません。また高齢者も元気なうちは働いて地域と関わることで、健康寿命を延ばせる可能性があります。

■支え、支え合うから生まれる居心地のよさ

小松市は人口急減が問題なのに対し、西圓寺のある野田町は開設から11年で、55世帯から76世帯にまで増えています。田んぼだらけでコンビニもない町なのに、移住してきます。その人たちに理由を聞くと、「居心地がいいから」「いろいろな人がいて面白いから」と答えます。

一般的に福祉の世界は高齢者、障がい者、子どもと縦割りで、無意識のうちに社会的排除が行われています。なおかつサポートの範囲は限定的です。けれども私たちには、福祉や医療を超えた“人の支え”が必要なのです。また“支える”“支えられる”の立場は一定ではなく時によって変わるのが人の営みですが、私たちはそのことを忘れてしまいがちです。

西圓寺の利用者に、首が動かない障がい者の男性がいました。同じ施設にいる認知症のおばあさんが彼にゼリーをあげようと頑張っていたら、2～3週間で首が30度も動くようになりました。プロが2年間リハビリしても、15度ほどしか動かなかったのにです。またそのおばあさんは西圓寺に来て、徘徊癖がおさまりました。人とのつながりが、どれだけ人を元気にさせるのか分かってもらえるでしょう。

■障がい者や高齢者の孤独心を救う地域の力

こうした現象は、白山市の「B's」やJV(共同企業体)で進める輪島市の「輪島KABULET」でも見られます。また両プロジェクトはまちの再生にも一役買っています。B'sプロジェクトには、年間のべ42万人が訪れます。人口11万人の都市にこれだけの人が集まるのです。また輪島KABULETには地元の人だけでなく、輪島観光で訪れたインバウンド客も訪れます。彼らは地元の人との交流を通じて、輪島の日常を体験することを楽しんでいます。

佛子園でも縦割りでグループホームをつくっていた当時は、障がい者や認知症の高齢者が徘徊する、万引きを繰り返すなど、トラブルだらけでした。彼らは孤独を埋めようと必死だったのです。だけどもごちゃまぜになってからは、すっかりとなくなりました。彼らを変えたのは、地域の力です。特別なことをしてくれなくたって、一緒にいるだけで変わってくるのです。

■福祉や医療のプロではなし得ないもの

ごちゃまぜ効果はまだあります。農家の高齢化と後継者不足で、最盛期の3分の1にまで生産量が落ちていた能登カボチャは、ごちゃまぜの人たちで結成した組合の手によりすっかりと回復しました。生産農家のみなさんは障がい者の人に教えるうちにみるみると元気を取り戻し、また障がいの重い人も大事にカボチャを磨くなど、やりがいを見つけて働いています。

福祉業界も労働力不足ですが、佛子園には全国から若者が集まります。「こんな居心地のいいところで働きたい」というのです。確かにごちゃまぜの施設は、佛子園の他の施設に比べ離職率が明らかに低くなっています。理由は分かりませんが、居心地のよさは確かに存在します。地域の人たちがつくり上げた雰囲気そのものです。福祉や医療のプロの手だけでは、なし得ないものです。

“ごちゃまぜ”は農耕民族だった日本人のDNAと相性がいいと感じています。世界に先駆け少子高齢化と人口急減に直面する日本は、独自のモデル、つまり“JAPAN WAY”を編み出すチャンスともいえるでしょう。

<文責：全労済協会調査研究部>